

## 『ベヴァリジ・レポート』と私

平 田 富太郎

第二次世界大戦後、比較的早く社会保障についての研究をはじめたが、そのときに注目したのは『ベヴァリジ・レポート』(Social Insurance and Allied Services: Report by Sir William Beveridge, London, 1942.)であった。

ダンケルクの惨劇のあった第二次大戦の最中に、英の当時の首相ウインストン・チャーチルが英戦後の再建の重要な一環として、ベヴァリジを委員長として英国民の生活安定のための「英社会保障制度計画案」をつくる大がかりな委員会を設けたという情報は流れていた。最初は単なる宣伝くらいに思っていたが、しかし約1年間という短い期間でベヴァリジの名を冠して1942年11月に『社会保険と関連サービス』という非常にまとまった報告が世に現れてくるとは当時は全くの驚きであった。

彼の社会保障に関する概念は彼のトインビー・ホール時代から発酵していたと思われるが、これが醸成されたのは『ベヴァリジ・レポート』においてであった。この『レポート』は大西洋憲章(The Atlantic Charter)で掲げられた社会保障(Social Security)をイギリスで実施すべく、戦争中の1941年6月、ベヴァリジを委員長として設けられた「社会保険および関連サービス各省委員会(Interdepartmental Committee on Social Insurance and Allied Services)の報告書である。この委員会は当時、社会保険および関連サービスについての実情と制度相互間の関係について調査し、運営面の改善について政府に勧告するという建前で設けられたものであったが、1942年末ベヴァリジによって示された『レポート』の草案は、社会保障の重要基本原則や政策についての政府への勧告部分が多く含まれており、政府部内から大きな反発を受け各省委員は委員会から総引き上げを行い、1942年11月に政府に提出した『レポート』の署名人はベヴァリジただ一人という異例のものであった。このレポートは縦23.5 cm、横15.5 cm、本文細字272頁、付録172頁、全299頁にわたり、その内容はかなり広汎・多岐である。彼はこの『レポート』の中で、社会には貧困(Want)、疾病(Disease)、無知(Ignorance)、陋隘(Squalor)および無為(Idleness)の5つの大きな害悪があるが、これらの害悪のうち「貧困」への攻撃が社会保障であるとし、「社会保障計画はまずをして就中もっとも緊急な諸ニーズを癒すために、また利用できる資源を能うかぎり最善に使用できるように再分配する方法である。」(ibid., Parag. 475. 山田雄三監訳・参照)。そしてこの社会保障計画は最低生活維持のために必要な所得の保障であり、経済的にも道徳的にも正当化できない「物質的窮乏」という恥辱から国民を解放させるための制度であると説いている(ibid., Parag. 455.)。彼のこの『レ

ポート』における社会保障のねらいは、すべての国民の「搖籃から墓場まで」の生活保障による「貧困からの解放」であって、「たとえ全体としての資源が望まれる生活基準に対して不十分であるとしても、それは実行する価値があるのである。」(ibid., Parag. 457.)と強調している。さらに彼は社会保障の必要な3つの前提条件として(1)所得制限なしの児童手当の支給、(2)疾病の予防、治療、社会復帰を目的とする国民保健サービスの全国民への提供、(3)雇用安定のための完全雇用の実施が必要であると主張する。

『ベヴァリジ・レポート』の根本理念は一定生活水準の保障による「貧困からの解放こそ人間の本質的自由の唯一のものである。」(ibid., Parag. 409.)というにあった。すなわち、人間の生存欲求の充足による生存権の実現こそ、その指導的理念であった。

この『ベヴァリジ・レポート』は戦後英社会保障制度確立の出発点をなしたものである。今日ではこの『レポート』の基調に対する批判や修正が現れており、イギリス社会保障制度も新しい展開を迎えているが、『ベヴァリジ・レポート』はこれまでの社会保障政策の上に大きな影響を与えたものであって、わが国もその影響をかなり強く受けた国であるように思われる。ベヴァリジは常に、「社会保障とは何人かの人にケーキとサーカスを揃える前に、すべての人びとにパンと健康を与えることである」と訴え続けてきていた。私の1954年頃の滞英中は彼はすべての公務から身をひいて、オックスフォードの自邸に引っ込み、静かな文筆生活を送っていたが、当時“Social Security at Cross Road”なる論文を新聞に発表して注目をあびていた。その中で「年金の最も重要な課題は実質価値の保障にある」との主張は決して忘れることができない。

(ひらた・とみたろう 早稲田大学名誉教授、故人)